植民地主義再考　目次

はじめに　6

第Ⅰ章　なぜなくならない民族差別　9

植民地主義再考――朝鮮〈三・一独立運動〉の記念日に　11
「関東大虐殺」からヘイトスピーチまで――朝鮮人虐殺事件は終わっていない　27
言葉への無頓着について――朝鮮高校〈無償化〉除外と植民地主義　41
朝鮮学校への差別、なぜなくならない――京都朝鮮学校〈襲撃事件〉判決の意味　60

第Ⅱ章　戦争と戦後を考える　81

朝鮮の戦後と日本の戦後――朝鮮戦争勃発から六三年　83

「上海事変」前後のこと――藤森節子『そこにいる魯迅』によせて　95
戦時下の反戦活動――志真斗美恵『芝寛 ある時代の上海・東京』を読む　123
日本の「終戦」と東アジアの〈終戦〉――戦後七〇年、「安保法制」に反対する夏に　141

第Ⅲ章　ナショナリズム雑感　169

国見（くにみ）の思想と捨て石作戦　171
山辺健太郎氏のこと　176
ダイナマイトとなったナショナリズム　181
大河ドラマ『軍師官兵衛』の描かなかった朝鮮侵略戦争　186
日韓市民の交流から生まれた本　193
あとがき　199

はじめに

本書は、二〇一二年一一月から一六年六月までの三年半、サークル誌『再考再論』に掲載した時評や書評を三つの章にわけ、執筆順にまとめたものである。書名は「植民地主義再考」だが、中身は朝鮮・韓国問題に焦点をあてている。その背景には以下の社会状況の変化があった。

――二〇一二年一二月に発足した安倍内閣が、その直後、朝鮮高校を〈高校無償化〉から除外する方針を打ちだす。二〇一三年には激しい反韓ヘイトスピーチ・デモが繰りかえされ、この年、都内だけで一〇〇件以上にのぼった。このころから、社会も政治も急速に右傾化し、朝鮮人・韓国人にたいする暴力的で排他的な言動が日常化していく。

近隣諸国との友好関係を築けない政府と、それに追随する人たちに〈平和〉を口にする資格があるだろうか。アジアの近隣諸国は、すべて日本に侵略された国々である。侵略した側がその歴史を忘れても、侵略された側の人たちがその記憶を消し去ることはない。

従軍慰安婦問題での「日韓合意」があった二〇一五年一二月二八日、記者の質問に安倍首相は、「私たちの子や孫の世代に、謝罪し続ける宿命を負わせるわけにはいかない。その決意を

実行に移すための合意だ」と答えた。この言葉に、朝鮮侵略の歴史を将来世代に伝えたくない、という彼の意図がかくされていないだろうか。

同じ一五年八月一四日の〈戦後七〇年談話〉で安倍首相は、「日露戦争は、植民地支配のもとにあった多くのアジアやアフリカの人々を勇気づけました」と述べている。でも彼は、日露戦争の目的であった朝鮮制圧と、五年後の「韓国併合」についてまったくふれなかった。首相は、政治家が謀略をもてあそび、軍人が残虐行為を働き、それをウソで塗りかためて抹殺しようとした朝鮮侵略の歴史など、国民の耳に入れたくなかったのだろう。

朝鮮をぬきに近代日本は成立しなかった――にもかかわらずこの国は、侵略の歴史の抹消と忘却を意図する虚言であふれている。状況は明るくない。だが、ヘイトスピーチ・デモへのカウンター・アクション、朝鮮学校など朝鮮人・韓国人団体との交流を深める活動もつづいている。ここに光を求めていきたい。

各論考はそれぞれ独立している。興味のあるところから読んでもらえるとうれしい。

二〇一六年六月